

ミサを生きる (20)  
【感謝の典礼】(6)

■奉献文 (エウカリスティアの祈り)

奉献文 (エウカリスティアの祈り) を構成する主な要素。

a) 感謝 b) 応唱 c) 聖霊の働きを求める祈り (エピクレシス) ☒ 前回まで

d) 制定の叙述と聖別—キリストのことばと行いによっていけにえがささげられる。それは、キリストご自身が最後の晩餐において制定されたものであって、パンとぶどう酒の形態のもとに、ご自分のからだと血をささげ、使徒たちに食べ、飲むように与えられ、同じ神秘を永続させるよう命令を残されたのである。

( 「ローマ・ミサ典礼書の総則 (暫定版)」カトリック中央協議会 46 頁 )

司祭は最後の晩餐のときにイエスが行なわれたことと、その時のイエスのことばを忠実に叙述します。このことは「わたしの記念としてこれを行いなさい」と言われたイエスのことばに基づいています。こうして、聖霊によって私たちの中に現存させられるイエス・キリストは、どのようなお姿をとったイエスでしょうか。司祭が唱える、最後の晩餐のイエスのことばが指し示すイエス・キリストです。

「皆、これを取って食べなさい。これはあなたがたのために渡される、わたしのからだである。」

私たちを生かすために自らを渡されるイエス・キリスト、そのために自らのいのちを十字架の死に引き渡されるイエス・キリストです。

「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハネ 15・13)

イエスにおいては、これはただのことばではないことを私たちは知らされたのです。

「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(マタイ 5・44)

人々の無理解と、憎悪と嘲笑的になりながら、その人のために十字架の上に死んでいったイエス・キリスト。あのパンとぶどう酒のうちに、私たちが食べ、飲む聖体のうちに、聖霊はそのようなイエス・キリストの愛のありようを指し示し、現存されているのです。何のためにでしょうか。私たちをも、そのようなイエス・キリストの愛に招くためです。そのような愛を私たちにも可能にするためです。

このようなイエス・キリストのありように招かない霊の働きは神の霊ではありません。私たちの自己保全、自己弁明、自己称賛に帰着するような、心の昂揚をもたらす霊の働きはすべて、聖霊の働きではないこととなります。聖霊は決して理解しがたいものではありません。私たちをイエス・キリストの十字架の愛に招く心の動きは、私たちの思いではなく、錯覚ではなく、私たちの中に働く聖霊の呼び声なのです。